

北の林

原田康子



北の林

原田康子



北の林

昭和四十三年十月十日 印刷
昭和四十三年十月十五日 発行

定価四〇〇円

著者 原田 康子

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(260)一一一番(大代)

振替 東京 八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えます)

印刷・光邦印刷株式会社 製本・大進堂製本所

© Yasuko Harada 1968 Printed in Japan

目次

北の林……………七

星から来た……………一七

北
の
林

装幀
宇野
亜喜良

北
の
林

一章

1

カーブをまわると、突然森が切れた。

谷川と山腹とははさまれた山道である。流れの向うにも針葉樹が密生しているので、これまではトンネルをくぐっているようなものだったが、そこまで来ると、ふいに目の前があかるんだのである。

剃刀でそいだように、山腹の樹木がなくなっていた。道はゆるやかに弧をえがいて、運転席から見ると、木のない山の斜面はちょうど正面に見えた。さほど急な斜面ではない。上のほうはかなり急だが、傾斜はしだいにゆるくなって道路に落ちこんでいる。

そこに、人骨が散らばっていた。マッチの棒をばらまいたように、白骨が山の斜面に散らばっていた。

室井理々子は思わず息を呑んだ。彼女が人骨だと思ったのは、ほんの一瞬のことで、こんなところに、しかもこんなにたくさん、人の骨が残っているはずはないと、じき思ひ直したものの、理々子の目にはやはり人の骨のように見

えた。でなければ、獣の骨だ。晩秋の午後の陽が落ちて、山腹は白々と光っていた。

理々子は速度を落し、注意深く車を走らせて行った。道幅がせまいうえに、正面の山腹に目をうばわれがちで、うっかりすると谷川に落っこちそうである。

近づく、獣の骨ですらなかった。倒木が山の斜面いっぱいに散乱していたのである。

昭和二十九年、洞爺丸を沈めた台風は、大雪の山塊にぶつかって、おびただしい風倒木を出した。理々子にもそのていどの知識はあったが、なにしろ十年以上も前の話である。また彼女は、大雪の山中にはいったことがないので、倒木が多いことなど考えてもみなかったのである。

これも嵐の通り路だったのであろうか。流れのがわの樹木が無事なところを見ると、嵐は山の斜面にだけぶつかったのであるうか。大木がほとんどだが、小枝も散乱しているように見える。長いあいだ風雨にさらされていたことを物語るように、倒木の色素は抜け落ち、白く枯れ切っていた。

理々子は車を停めて、こわごわ山腹を見上げていたが、あわててギヤを入れた。骨でなくとも薄気味悪かった。理々子は逃げるようにスピードをあげ、二キロも先に進んでやっと車を停めた。手袋のなかの手が汗ばんでいた。

理々子は手袋を脱ぎ捨てて、車の窓をすこしあけた。冷気が流れこみ、彼女ははっと息をつく、煙草を取り出そ

うとしてグローブボックスに手をのばしかけた。が、その手はそのまま途中でとまった。

睡眠薬がそこにはいつていたのである。包装がそれぞれ異なる睡眠薬の箱が六個だ。理々子は、途々六軒の薬屋に寄って、睡眠薬を買い集めて来たのである。

グローブボックスを見ているうちに、理々子は腹だたしくなってきた。自殺を考えている人間が、たかが倒木くらいに、あんなにもおびえるものだろうか。彼女には自分のあわてようが、みっともなく滑稽に思えた。

大体、札幌を出たとき、理々子には死ぬ気は毛頭なかった。大雪まで足をのばすつもりもなかった。好天にさそわれて、理々子はどこというあてもなく車を出したのである。

土曜日の朝だったが、仕事はなかった。あすの日曜も仕事がない。商業デザインの仕事をしている理々子は、週末に休めるとはかぎらない。仕事の切れめが、すなわち彼女の休日というわけだった。

夫の留守も、彼女の気持を軽くしていた。夫の克郎は、二日前から東京に出張していた。克郎は女好きだから、旅に出るとあぶないものだった。克郎の浮気にはじめて気づいた当座、克郎が旅に出ると、理々子も人並にいらだったものだが、しかしそれは何年も前の話だ。いまでは克郎が出張すると、理々子はむしろせいせいし、独身時代に返ったように、気持の若やぐのを感じるのであった。

理々子は、石狩平野を東にむかって車を走らせた。それは旭川へ通じる国道で、舗装された気持のいい自動車道路である。

空が高かった。刈り入れの終わった野は金茶色に輝き、そのはてに空知の山々がくっきり姿をあらわしていた。

「遠くに行きたい」と、理々子はつぶやいた。

あの山の向うには、さらに美しい山がある。大雪の山々が北海道の中央部を領して、重畳と連なっている。ひさしぶりに山を見るのも悪くはなかった。

理々子は、なかばスピードに酔っていた。とぼすのが好きなのだ。彼女の運転は女性にはめずらしく大胆敏速で、国道を通るときは、いつも制限速度ぎりぎりのスピードで車を走らせた。

赤や青や金色の紙の星が、車の後方にひらひら流れてゆくようだった。それは、つい前日、彼女が菓子屋にとどけたクリスマス用の包装紙から抜け出した星である。五日前にとどける約束であったのが、どういうわけかいアイデアが浮ばず、ようやくきのうになってとどけることができただけれど、それも決していい出来とは言えず、また注文主のほうも満足ではないようだった。濃厚な支配人は、べつに文句は言わなかったが、理々子には顔色でわかった。

「いいでしょう」と、支配人は短く言った。

そこは札幌では名の通った老舗で、理々子はその店のパッケージを一手に引き受けてきたのだが、この調子がつづ

くと、やがてはその店の仕事を失うことになるかもしれない。この前の仕事もよくなかったのだ。

しかし、そんなことが自殺の原因にはならない。デザイナーとして理々子は十年近くの経験を積み、少々不調でも、パッケージを描かせては、彼女にかなうデザイナーは札幌にはいなかった。

夫の品行にしてもおなじである。克郎は水商売の女を相手に適当に遊んでいるようだが、きまった女とつづいていけるけいはなかった。要するに浮気で、そのぶんだけ克郎は理々子の機嫌を取るのに骨を折っていた。こんなことで死なねばならないとすれば、世間の細君の大半は死ななければならぬことになる。

理々子は機嫌よく車を運転して行った。遠くの山々に心をさそわれ、その山の奥深くに姿を消してしまいたいような誘惑も感じていたが、それも旅行者の感傷にすぎなかった。誘惑を感じる一方で、大雪の近辺には温泉が多いから、温泉に一晚泊って来てもいいと、理々子はちゃんと考えていたのである。

岩見沢で、理々子はフィルムの残りが少なくなっているのを思い出した。カメラも理々子の商売道具のひとつで、旅に出るとき、カメラを持って出るのは彼女の習慣だった。

理々子はカメラ屋に寄った。誰もいなかった。国道沿いの小さな店である。奥の住居に通じるらしい戸がなかばあ

いていて、テレビの音が聞えた。

「ごめんください」

理々子は声をかけたが、返事がなかった。

「のんきな店……」

カメラ屋といっても、現像と焼付をおもにやっているのだらう。申しわけていどにカメラを並べたショーケースの上に、埃がうっすらかかっていた。

理々子は奥をのぞきこむようにして再び声をかけた。

「ごめんくださいあい」

やはり答えはなかった。テレビの音がやけにはっきり聞えるだけである。

国道を行き来する車の振動がつたわって、表戸のガラスがびりびりふるえていた。運転中は一向気にならないのに、こうして店先に立っていると、脳髓がきしむようなひびきである。

突然、理々子はいとわしさを感した。どこかうすよごれたこの小さな店、テレビのコマーシャルのそらぞらしいひびき、赤や青や金色のうすよごれたクリスマス星の星、車の音、そして、いい気で車を走らせて来た彼女自身……。

理々子はおもてに出た。数軒先の薬局の看板が理々子の目にはいった。

道ばたの熊笹の葉が、寒そうに風に揺れうごいていた。三時をすぎたばかりだったが、日はとうに山陰にはいつて、流れの色もかげつていた。

大雪といっても、石北峠を越えたのだから、東大雪の山中だろう。原生林が車の周囲を取りかこんで、こずえのところどころに霜枯れた山の背がのぞいていた。

理々子はあたりを見まわしていると、森が動き出してくるような気がした。樹木が一本一本動き出して、車のほうに向ってくる。マクベスのバーナムの森だ。むろん森を動かしているのは、甲冑に身を固めた兵士たちではなく、木の精霊であろう。そして、この森の背後に木々の墓場がある。

理々子はぞくっとした。それから彼女の視線はいよいよやながらのように、開きっぱなしのグローブボックスのなかに落ちた。運転席の灰皿も開きっぱなしである。乱暴にもみ消した煙草が二本、灰皿に突っこんであつた。

衝動的に睡眠薬を買ったのである。あととはぶつりと糸が切れて、夢中で買集めて来たので、魔がさしたとでもいふほかはない。このまま死ぬのは馬鹿げていると思ひ直すだけのゆとりを理々子は取り戻していたが、そうかと書つて、札幌に引返す気にもなれなかった。

帰ったところで、それほど魅力のある生活が待っているわけではない。第一、戻りたくても、この道ではターンができない。こんな道でも車は通るのか、ところどころに待避所が設けてあつたが、たとえメートルでも車を動かすのはおっくうだった。

理々子は疲れていた。薬局と食糧品店に寄つたほかは、ほとんど休みなしに車を走らせて来たのだ。さいわい理々子は、よごれたものを身につけていなかった。札幌の自宅にもよごれた下着は残っていないはずだった。

理々子はひざの上にハンカチをひろげると、薬の箱を手にとって、一つ一つハンカチの上にあげていった。岩見沢で二箱、美唄で一箱、滝川で一箱、旭川で二箱だ。彼女が辿つて来たその道は遠くに細くうねって、地球の裏がわの道のように思い出された。

札幌の街がにわかに距たつたようだった。そこには彼女と親しい人たちがいるのに、誰の顔も浮んで来ない。克郎のいる東京はさらに遠い。理々子のこれまでの生涯も浮んで来ない。過去も人々の顔も、遠くの空間に舞っている紙片のようにちらちらして、一向に感慨めいたものは湧いて来ない。肉親の顔だけは目先にちらつくようだったが、理々子は肉親を思い出したくなかった。

ハンカチにまといると、薬はかなりの量になった。三十錠入りの箱が六個で、百八十錠である。これだけをビールで飲むのである。

「死ぬかしら……」と、理々子はつぶやいた。

量はおそらく充分であろう。アルコール分は血行をよくするから、薬の吸収も早いはずである。睡眠薬はしばらくつかっていいし、それに理々子は昼を抜いていた。旭川でサンドイッチを買ったのだけれど、食べる気になれずに途中で捨てて来た。

人に発見される心配は、まずなさそうに思えた。こんな道を通るのは樵が炭焼きくらいのものであろう。国道からこの道にはいつてからは、理々子は人はおろか鳥さえ見かけなかった。

むろん、車を捨てて森のなかにはいつてしまえば、死は一層確実である。が、木立の奥はほの暗くて、熊でもひそんでいるように見えて、とうてい森にはいる気にはなれなかった。

ヒーターを切ってしまったので、車のなかは寒くなっていった。窓はとうに閉めてあった。

ビールをひと口飲むと、いくらか気持が落ちついた。

理々子は一瞬ためらい、軽く薬をつかんで口のなかに放りこんだ。たちまち喉と口いっばいに、ひりひりした刺激性の味がひろがった。理々子はあわてて遮二無二ビールで流しこみ、さらに薬をつかんで口のなかに投げ入れた。

それにしても、死ぬということ、なんという厄介なことだろう。六軒もの薬屋に立寄りなくてはならない。ビー

ルも買わなければならぬし、こんな山奥までやって来なければならぬ。そしてこの味だ。

理々子は目をつぶって薬を飲みつづけた。この不快な作業を一刻も早く終えたかった。死のうが生きようがどうでもよかった。この味、この寒さ、山のこの無気味な静けさから逃れだしたい気持ちに理々子はなっていた。

薬はかなり減った。三分の二は飲んだろうか。

そのとき、かすかな物音が行手の森の中から聞えた。あきらかに自動車のエンジンの響きである。

理々子ははっと前方を見つめた。

エンジンの音はたちまち大きくなって、カーブの先にトラックの鼻面があらわれた。山のように木材を積みあげたトラックである。

理々子はうろたえた。よもやここではかの車と行き会うなどとは、夢にも思わなかったのだ。

トラックは理々子の車の前に停った。理々子の車が道をふさいでいるので、トラックは通れないのである。どちらかが、道ばたいっばいに車を寄せなければ、二台の車がすれちがうことはできなかった。

トラックの運転席には、黄色いヘルメットが二つ並んでいた。車体をグレーに塗ったトラックで、ナチス・ドイツの軍用トラックのようにつく見えた。

しかし、そんなのん気なことを考えている場合ではない。理々子はダッシュボードの上のビールの罐を床におろ

し、薬をハンカチごとカーコートのポケットに突っこんでエンジンをつけた。

同時にトラックも後退をはじめた。道をあけて、理々子の車をやりすごすつもりらしい。道ばたの熊笹の中に少しずつ後尾を入れていった。

理々子は車を出そうとした。なんとかこの場をつくろわねばならなかった。

ところが、理々子の手足は自由にならないのである。足がすべって、なかなかクラッチにからなかった。やっとペダルを踏みこんだかと思うと、こんどはギヤレバーから手がすべって、車は動き出しそうもなかった。

酔ったのだからかと、理々子は息をついた。それとも薬が効いてきたのだからか。

理々子は手の汗をぬぐおうとして、うっかりハンカチを出した。睡眠薬があたりいちめんに飛び散った。

トラックの助手がとび出してきた。まだ若い男である。「どうしたんです。故障かい？」と、男は車のなかをのぞきこんだ。

理々子は必死に頭をふった。

若者はいぶかしげな顔つきで、

「故障なら手を貸すけど……」

突然、若者は息を呑んだ。散乱した睡眠薬から薬の空箱へと若者の視線は移り、大きく目を見ひらいて理々子を見ると、陽灼けた顔から血の気が引いていった。

若者はいきなり車のドアをあけた。

「睡眠薬か」

理々子は声が出なかった。無意識に頭をふりつづけていた。

「嚙んだのか。それだけ全部か」と、若者は理々子の手首をつかんで、車の外に引きずりだした。

トラックの運転手も駆け寄って来た。

「どうしたんだ」

「死ぬ気だよ。睡眠薬を飲んでる」

運転手は車のなかをのぞきこむと顔色をかえた。

「おい、吐かせろ。早いとこ吐かせろ」

若者は一瞬ひるんだ目の色になった。その目に見入りながら、理々子は頭を振りつづけた。

3

闇のなかでなにかが鳴っている。

それは森をゆるがす風の唸りのようであり、森を疾駆するトラックの響きのようでもあったが、ふとその音がなごんで人声にかわり、低い声とはずんだ声とが交錯しながら近づいてきて、女二人の話し声だとはっきりして、理々子は目をさました。

小さな病室だった。白髪のお婆が、隣のベッドの上でゆったり半身を起していた。ほかにベッドはなかった。

窓の外の空はまだあかるかった。夕暮れ近くなのか、雲はほのかな赤味をおびていた。二階の病室らしく、ベッドからは空しか見えなかった。

その空を背に、女が一人立っていた。髪を高く結いあげたスラックス姿の女である。まげは外光を受けて金色にけむり、窓に浮きあがっている半身の輪郭全体がぼやけていた。

「やっぱり助かった……」

理々子は口のなかでつぶやくと、胸ににがさがひろがってきた。薬を吐かせられては、助かるのも当然だった。

老婆と女は、理々子が目ざめたのを見て、話しやめたものらしい。

女はびっくりして、息をつめて理々子をうかがっていたが、ついと窓ぎわからはなれて、理々子のベッドのそばに近寄って来た。

「あんた、よかったねえ、気がついて……」と女はせきこむように言った。

「さっきから、もぞもぞ動いてたから、もう気がつくんじやなかろうかって、おばあちゃんと話してたんだよ」

目も口もまるい丸顔の女である。目と目の間隔がはなれていた。びっくりするようなけばしいサーモン・ピンクのカーディガンを着ていた。

理々子は、カーディガンの色がきつすぎて、また女の顔が近すぎるようで、心持ち頭をうしろに引くようにしなが

ら女にたずねた。

「ここ、どこですか」

「留々蘭よ。留々蘭の病院よ」

「留々蘭？」

「ほら、北見の近くのさ。知らない？」

理々子も留々蘭の名は知っていた。旭川から北見へ通じる石北線の沿線の町で、女が言うように北見市に近い。しかし、理々子が薬を飲んだ場所からは、かなりはなれているはずだった。

むろん、トラックの連中が、理々子をこの病院に運びこんだのだろう。理々子にはなにもおぼえていない。薬を吐かせられているうちに、理々子は意識を失ってしまったのだ。女に日付をたしかめると、睡眠薬を嚥んだのは前日のことと知れた。いまは夕暮れのようにだから、まる一日眠っていたことになる。

しかし、理々子は頭がはつきりしなかった。一月も眠っていたようであり、ほんの数時間しか眠らなかったような気もする。留々蘭というのがそもそも藪から棒で、理々子はまだ夢を見ているようだった。

女は気負いこんで、

「きょうは日曜日よ。わかる？」

「聞かんことまで言わなくともよいわな」と、老婆が横からゆったりした口調でたしなめた。

「それにあんたの声はでかすぎるわい」

女はしょげると、子供っぽい顔になった。理々子より少し若いらしい。

「それよりお茶じゃ。目をさましたら、濃なお茶をたんと飲ませるように先生が言うとした」

老婆が言うのと、女はにわかに生氣を取りもどした。

「おばあちゃん、お茶持つてる？」

「番茶ならな。煎茶なら誰ぞ持つてるだろう」

「そんならあたし、先生に聞いてお茶わかして来る」

女は腰をひねって病室から出て行った。女の腰はまるく、スラックスが窮屈そうで、くろうとらしいと、理々子は気づいた。

女はポットにひとつお茶を用意して来た。吸い呑みもどこからか借りて来て、枕元に椅子を引き寄せて、理々子にお茶を飲ませた。

理々子は、見も知らぬ女の看護を受けるのは気がすまなかったが、このさい仕方がなかった。女の態度には押しつけがましいところがなく、その点、理々子はよほど気が助かった。

それに理々子は喉が渇いていた。胃も喉も舌も、かわいてちちんでしまったような不快な渇きである。

理々子は吸い呑みで三つ煎茶を飲んだ。女ははつと眉をひらいて、

「ついでだから、お手洗いに行かない？ 連れてったげるわ」

「ええ」

理々子は言われるままにベッドを出た。一人でも歩けそうなのだが、足元がふらついて、女の助けがなければ頼りなかった。力というものが、体内からことごとく抜け落ちてしまったようだった。

女は心配そうに廊下に立って待っていたが、理々子をベッドに連れもどすと、意味ありげにくすつとして、どこに置いてあったのか、かさばった紙包みを取って来た。

「これ、みっちゃんからよ。お林橋よ」

「……………」

「きのうの若い衆よ。おぼえてない？」

女は椅子に腰をおろすと、きのうの青年は稲垣光男といて、留々蘭営林署のトラクターの運転手だとおしえた。

「倒した木をトラクターで引っぱるのよ。あのずうと奥で木を伐ってるのよ。飯場に泊りこんでるんだけれど、きのうは土曜日で、トラクターに便乗して山から下って来たのね」

理々子はだまって女を見あげていた。

「光ちゃんがここに運んでくれたのよ。あんたの車でさ。あんたの車、空色じゃない？ 病院の横にあるわよ」と、女はちよつと窓のほうを見た。